2025年7月13日　説教「一番小さい者が」

ルカの福音書9章46～56節

今朝の聖書箇所の前段は、山上の変貌後に、山から降り、悪霊につかれた子についての記事でした。弟子達が悪霊追放をできなかったことを受け、イエスは汚れた霊を叱り、その子を癒されたのでした。

１．イエスを受け入れる者（46～48節）

①誰が偉いか（46）**「さて、弟子たちの間に、自分たちのなかで、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。」**

山にペテロ、ヨハネ、ヤコブだけが同行し、弟子達には悪霊追放できなかったともあったからか、彼らの間では誰が偉いのかということに、関心が集まりました。そして、「自分が偉い」「彼が上だ」「いや自分の方が上だ」といった会話が交わされるようになりました。

②心の中を知って（47）**「しかしイエスは、彼らの心の中の考えを知っておられて、ひとりの子どもの手を取り、自分のそばに立たせ、」**

イエスは、弟子達が議論をしているところにはいませんでした。しかし、彼らがどんな議論をしていたかは読みとっておられました。そして、弟子達に語られるにあたって、近くにいる一人の子を連れて来られました。そして、その子どもの手をお取りになり、その子をそばに立たせられました。

③一番小さい者が（48）**「彼らに言われた。『だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる者です。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れる者です。あなたがたすべての中で一番小さい者が一番偉いのです。』」**

その上で、弟子達に言われたのです。それは、一人の小さな子どもでもないがしろにせず、受け入れることは、主イエスを受け入れることだということ。さらに、主イエスを受け入れる者とは、父なる神を受け入れることだということを語られました。つまりは、小さな子どもを真に評価する者こそが、父なる神を本当に知る者であることを伝えようとされているのです。そして、「一番小さい者こそが、一番偉いのです」と教えられています。主なる神の前ではもちろん、人の前でも謙遜な者こそが偉いということを示されているのです。

２．イエスの名を唱えて悪霊を追い出す者（49～52節）

①仲間ではないので（49）**「ヨハネが答えて言った。『先生。私たちは、先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、やめさせました。私たちの仲間ではないので、やめさせたのです。**

ここで、弟子のヨハネは答えたのです。それは、こうでした。自分たちは悪霊を追い出す権威を授けられた者達ですが、そうではない者たちがイエスの名によって悪霊を追い出しているという問題についてです。それについて弟子達は、やめさせたということを伝えたのです。その理由は、彼らは「私たちの仲間ではないから」ということでした。つまり、彼らはイエスの弟子ではないから、そのようなことをする資格がないと言おうとしているのです。

②反対しない者（50）**「しかし、イエスは彼に言われた。『やめさせることはありません。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。』」**

それに対して、イエスはやめさせる必要はないといわれました。その理由は、クリスチャンに反対しない者は味方だからと言われるのです。つまりはイエスの名によって悪霊を追放されたということは、聖霊がそこに働かれたことをイエスが保証されたのだと理解できます。

３．御顔をエルサレムに向け（**53～56 節**）

①御顔をまっすぐに（51～52）**「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐに向けられ、ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリヤ人の町に入り、イエスのために準備した。」**

ルカの福音書はまだ 9 章ですが、ここには「天に上げられる日が近づいて来たころ」とあります。ガリラヤ伝道からエルサレムでの十字架と復活の出来事の間に、ルカはたくさんの章を割いています。9章 51 節から 19 章 44 節までの長い章を用いて貴重な記事を記しているのです。ともあれ、イエスの心はエルサレムに向かう堅い御決意があって、「御顔をまっすぐに」そちらに向けておられたのです。もちろん、そのためにはまずサマリヤの地を越えていかねばなりませんでした。計らずも先週、サマリヤの女の話を学び、その事情は説明した通りですが、民族的にはユダヤ人と異なる人々がいるサマリヤの地を越えることは一筋縄ではいかなかったのです。そこで、まずは弟子達を遣わしたのです。

②サマリヤ人はイエスを受け入れず（53）**「しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。」**

あのサマリヤの女は、水を所望したイエスに対して、敬意を払う様子でしたが、ここではサマリヤの人々はイエスを受け入れようとしませんでした。弟子達が予め行って準備したことにより、相手方も構えてしまったのかもしれません。それ以上にイエスのお心がエルサレムに向いていることが明らかであったのでサマリヤ人の心を固くしてしまったと思われます。

②弟子達は戒められ（54～56）**「弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。『主よ。私たちが天から火を呼び出して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。』しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。そして一行は別の村に行った。」**

サマリヤ人が主イエスに失礼な態度をとったと思った弟子のヤコブとヨハネは憤りました。そして、かなり激しい言葉を伝えています。何と、『主よ。私たちが天から火を呼び出して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。』というのです。実際のところ、そんなことを彼らができる筈もないのですが、それだけ本気に怒っていたということです。しかし、イエスご自身は冷静でした。振り向いて、彼らを戒めたのでした。そして、彼らは別の村に進んで行ったのです。

《結論》　今朝は「一番小さい者が」をテーマに考えます。

第一に、「一番小さい者が偉い」という言葉の意味です。

その意味については、いささか共に考えましたが、もう少し深めましょう。マタイの福音書にある並行記事では、こうあります。「あなたがたも悔い改めて、子どものようにならない限り、決して天の御国には入れません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人なのです」。また、小さい者につまずきを与える者については、厳しいお言葉を言われています。パウロの書簡にも「へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」（ピリピ 2:3）とあります。弟子達は、イエスの名によって悪霊を追い出している者たちやめさせましたが、イエスは彼らを容認しました。イエスは弟子達が特別な者達であるとうぬぼれることを退けているのです。弟子達は知らず知らずのうちに、鼻高々になっていたのです。弟子達は、誰が偉いのかなどと論じ合っているよりも、より重要なへりくだりの学びをしなければなりませんでした。

第二に、この課題を学ばされた旧約時代の人物についてです。

謙遜という、大きな学習をさせられた人物はイサクの子ヤコブです。彼は兄エサウから長子の権利をもぎとった上に、父イサクをあざむいて祝福を奪ってしまいました。母の故郷パダン・アラムに逃げました。しかし、そんな彼にお教えなさいました。目的地への途上、ベテルで彼は石を枕にして横になると、夢を見ました。梯子が天にむかってかけられ、御使いが梯子を上り下りしていたのです。そこで「あなたとともにある。捨てない。連れ戻す。祝福する。」という祝福の約束を受けました。パダン・アラムでは 20 年にわたって、不慣れな地で、厳しい叔父などの下に働き苦労しました。導かれて約束の地に戻されてきますが、その途上でもマハナイムの経験、ヤボクの渡しでは神との格闘を経て、兄エサウとの再会が与えられます。それらはヤコブが神に仕える謙遜な者にならせるための主のご訓練でした。彼はその後の人生でも、愛する息子ヨセフを失うという試練も経験しますが、年を経てエジプトの総理大臣となったヨセフと再会しました。主は苦難をも用いて、彼を謙遜の道へと導かれたのです。

第三に私たちにも主は仕える心を教えておられることについてです。

イエス・キリストは「人の子が来たのも仕えられるためではなく、仕えるためである」（マルコ 10:45）とありますが、イエスを見上げる者たちも仕える心を学んでいきたいのです。教会においても、私たちは重要な地位に着くために奉仕するわけではありません。上に上っていくのではなく、どこまでも主に仕え、人に仕えていくのです。社会にあっても、仕える心をもって、働いていきたいのです。もちろん、利益追求社会でそんな甘いことを言っていられるか、という意見もありましょう。しかし、基本的に謙遜に仕える心は大切で、世の中も受け入れるでしょう。それは家庭にあってもそうです。

改めて、このへりくだりと、仕える心をいただくためにも、傲慢な心、横柄な態度、威張る心、他を見下げる心などを悔い改めていきましょう。